

戯曲と小説の間  
——*The Lamplighter* と ‘*The Lamplighter’s Story*’  
の関係性——

青 木 健

序

ディケンズの小説がその人物造型やプロットにおいて、極めて戯曲的要素が濃厚であることは広く知られている。事実、彼は幼少のころから演劇への関心と執着が強かったばかりでなく、まかり間違えば俳優の道を歩んだかもしれないことは彼の伝記に明白である。また中年以降素人演劇に心を奪われたし、最後の12年間は自作公開朗読という、いわば一人芝居にエネルギーを集中させ、死を早めたとも言われている。

このように、演劇への興味と関心が強かったにもかかわらず、不思議なことに、彼自身が書いた戯曲の数は極めて少ない。実質的に、*The Pickwick Papers* を発表しつつあった1836年に二作品、そして1838年に本稿で論じる *The Lamplighter* 一つにすぎない<sup>1)</sup>。まだ作家としての文名が上がっておらず、小説家としても自信が持てなかったからという推測はできる。他方、次の書簡を読むと、当時(1836-1838)彼は劇作家としての力量と資質を少なからず持っていると自負していたふしがある。バーレッタ *The Strange Gentleman* (1836) に続いて、軽歌劇 *The Village Coquettes* (1836) を発表した際、音楽を担当した John Fullah に「この作品が、劇作家として小生が世に出るきっかけになればと思います」<sup>2)</sup> と願望を述べ、また出版を引き受けた Richard Bentley に対しては、一歩踏み込んで次のように書き送っている。「ドラマが音楽と、詩が歌と一体化したのはこの作品が最初なのです。また、耳の肥えた人たちがこの歌劇を聴いたなら、これはその両方を備えていると評価するに違いあ

りません」<sup>3)</sup>。後者は出版社に売り込もうとする新参者の常套手段と言えようが、ディケンズにはそう言える自信があったのであろう。

しかし、上記の二つの軽歌劇は、短期間上演されこそすれ、観客を長く惹きつけることはできなかった。生前ディケンズはこれらの作品を自らの全集の中に入れることを拒んだという。最も演劇的な小説家が、優れた戯曲が書けなかったのはたしかにパラドックスであるが、ディケンズの多くの小説は戯曲化され、その内のいくつかは数えきれないほどの回数に及んでいるし、彼が翻案を許諾したばかりか、翻案に自ら手を貸したこともあった。ところが、一度だけ逆の経過を辿ったことがあったのである。つまり、自らの戯曲を小説に作り直したのである。本稿は、そのユニークなプロセスを追うとともに、両者に通底する要因を指摘し、さらに戯曲を小説に転化する際の特徴を分析し、最終的にはディケンズ小説特有の構成要素を探ってみたい。

## (一)

笑劇 *The Lamplighter* (1838)<sup>4)</sup> は、ディケンズの膨大な作品群からすればささやかなものであり、事実彼は生前この作品も全集に入れることを拒んだという事実をみれば、彼自身の評価もおのずと明らかである。しかし、この作品が前述したバーレッタや軽歌劇と違う点は、短編小説に翻案されたことにある。その成立事情は極めて興味をそそる。作品発表の動機と経緯と関わって、当時のディケンズの間関係を始め、さまざまな点が明らかになるからである。

1837年6月頃、当時演劇批評家として活躍していた John Forster (1812-76) が、シェイクスピア俳優として名声を博していた William Charles Macready (1793-1873) にディケンズを紹介。二人は程なくして年の差のある親友となる<sup>5)</sup>。知り合ってから5か月もたたないうちに、ディケンズはマクリーディのために喜劇作品を執筆したい旨をフォースターに書き送っている。しかし、一方で「喜劇のことを考えようとする、いつも『行き止まり ('No Thoroughfare')』が小生の真正面にドンと控えているのです<sup>6)</sup>」とも書いて、喜劇作品執筆の難しさを吐露している。それでも、1838年11月19日にマクリーディ宛に「今月中にはそれ [約束した作品] が貴方の手に入るようになります——お約束しま

す<sup>7)</sup>と書き送っている。当時ディケンズは *Nicholas Nickleby* を執筆中であり、*Oliver Twist* の最後の仕上げ中で多忙でもあったことから、その合間を縫っての執筆は、十分な推敲を重ねることが難しかったと思われる。それでも、同年12月4日朝、夕食までにはマクリーディに約束した作品の執筆を終えられるだろうとフォースターに書き送っている<sup>8)</sup>。そして、翌日(12月5日)ディケンズはフォースターを伴ってマクリーディに会い、書き下ろしたばかりの作品を彼の前で朗読する。マクリーディはこの時の状況を、朗読の様子、作品に対する評価も含めて日記に詳細に記しているため、少々長いが引用する。

1838年12月5日——ディケンズは自ら描いた笑劇を持参して私の前で朗読した。対話は非常によろしいし、ところどころ急所を突いているが、プロットが貧弱と思われる。[ただ]ディケンズは、経験を積んだ俳優のように見事な朗読を私たちの前で披露した。驚くべき男だ。

12月11日——ディケンズがフォースターとやって来て、例の笑劇を朗読した。明らかに期待外れだった。物語が平坦で奥深さがない。とってつけたような笑い声が二、三上がったが、全体に静かな微笑に包まれた。時々割り込むようにフォースターの高笑いが聞こえた。この男は、誰に対してもイエスマンとなるような軽薄な奴だ。彼はディケンズを焚き付けてこの笑劇を書かせ、今や(成功の有無を度外視して)この作品を舞台にかけようと躍起になっている。……とにかくリハーサルを実施して、それを見てディケンズがどう判断するかで決めようということになった。このおせっかいな男、フォースターの差し出がましい愚行をいくら非難しても足りない気がする。この男は、こんな風に友人たちを苦境に陥らせても恬として恥じない。本当に困った奴だ。

12月12日——ディケンズの笑劇に関してディスカッションが長く続いた。Bartley と Harley<sup>9)</sup> も呼び入れられて議論に加わった。その結果とうとうフォースターも折れてこの笑劇を引っ込めることに決着した。

12月13日——ブルワーとディケンズに、この作品を撤回して欲しい旨を説明する手紙を書き送った。その中で、ディケンズには大い

なる感謝の気持ちを伝えた。ディケンズは称賛に値する返信を書いてよこした。心気高い人々や心暖かい人々との出会いは何と喜ばしいことか。ディケンズもブルワーも人間味溢れた人物の典型だ……<sup>10)</sup>。

マクリーディが日記で言及した書簡に対するディケンズの返信には、彼としては珍しく潔さと友情を大切にすゝる気持がにじみ出ている。

……この件に関してはただ一つの意見を持つのみです。——この笑劇は直ちに引っ込めるべきだと。貴方の言うことすべてに完全に同意します。そして、貴方の親切で男らしい振る舞いに心底より感謝します。……小生の失望感は一とえにあなたの役に立たなかったという点にあります。もしこのような機会が再びありましたら、小生の熱意は一段と強まりこそすれ、決して意気阻喪することはないとお誓いします<sup>11)</sup>。

マクリーディがディケンズの朗読の見事さに驚嘆したことは前述したが、ディケンズ自身は後年別の角度からこの二度の朗読を甘酸っぱい想いで振り返っている。というのも、マクリーディとともに劇場の共同経営者であり、ディケンズの朗読を聴き入っていたバートリーこそ、作家として成功する以前、ディケンズがオーディションに応じようとした時、彼をテストする予定の人物だったからである。その時ディケンズはひどい風邪のため、その機会を失い、俳優への道を断念したという因縁があった。ディケンズは後にフォースター宛の書簡で、こう記している。「私はコヴェント・ガーデン劇場であの不幸な笑劇を読み上げている時、聴き入っていたバートリーの心が葛藤にふるえている風に見えた。否、実はあの滑稽な笑劇は上演するには不適格だと考えていただけかもしれない」<sup>12)</sup>。

結局、マクリーディやバートリーとの協同は成立しない運命にあった。しかし、若い日の出会いは、対立と衝突を繰り返したディケンズに人と人とのつながりの重要性を認識させたはずである。とりわけマクリーディとは生涯暖かい友情を維持し続けた。このような友情にもかかわらず、脚本が退けられた理由は、劇場経営者としての判断が優先されたか

らと思われる。たしかに、この笑劇は興業を維持するには多くの点で迫りに欠ける。しかし、他方この作品はある意味でディケンズの特徴を表していると思われるので、検討する価値はあろう。

## (二)

不成功に終わった笑劇をもとに短編小説が書かれるプロセスもまた、複雑で長い時間を必要とした。そのきっかけは、ディケンズの処女作品『ボズのスケッチ集』(*Sketches by Boz*, 1836)の出版に関わったジョン・マクローン(John Macrone, 1809-37)の突然の死である。二人の関係は、この処女作品を第一集(二巻本)及び第二集(一卷本)を出版した時点では良好であった。しかし、ディケンズの処女小説『ピクウィック・ペーパーズ』(*The Pickwick Papers*)が好評を博し、その出版形式が月刊分冊であったことから、マクローンは『ボズのスケッチ集』をあらためて月刊分冊で出版しようと目論む。ディケンズはこれに強く反対する。フォースターに書き送った手紙にその理由が述べられている。

小生が『ピクウィック』の好評につけこみ、金儲けだけを目的にこの旧作[『ボズのスケッチ集』]に新しい衣裳を着せて読者に押し付ける了見だと誤解されたりするのは、もちろん絶対に避けたいところです。また、小生の名前が、同時に三種類の出版物の著者として公衆の前にさらされるなら、悪評を招くことは必定です<sup>13)</sup>。

ディケンズがここで主張している反対理由は、一見妥当のようだが、必ずしも説得力のあるものではない。月刊分冊終了後に合本として出すことは、当時慣行であったし、その逆も許されていた。『オリヴァー』は月刊誌連載終了後、三巻本で出ているし、現にマクローンが意図していた月刊分冊形式での『ボズのスケッチ集』は後に、チャップマン&ホール社から出版されている。この問題は、結局ディケンズがチャップマン&ホール社の手を借りて(2千ポンドを前借して)マクローンから版權を買い戻して決着を見る。この直後にマクローンは、妻と二人の幼い子供たちを残して1837年二十八歳の若さで突然死する。その後、経済的に苦境に陥ったマクローン未亡人は、ディケンズに援助を求める手

紙を繰り返し出す。最初無視していたディケンズも、重い腰を上げて彼らの救済を決意する。彼は、さっそくマクローンと深く関わっていたW.H. エインズワースに協力を要請、快諾を得た後、寄稿者を募りアンソロジーを出版、その収益を未亡人に献金するという計画を立てる。彼の呼びかけで、結果的にエインズワース、トマス・ムーア、リーチ・リッチ、A. ストリックランド、W.S. ランダーその他が寄稿を約束した。出版者コールバーン (Henry Colburn, ?-1855) との契約には、ディケンズが、編集し、序文を書き、彼自身のオリジナルの作品一編 ('The Lamplighter's Story' の誕生) を寄稿する、さらにはクルックシャンクの挿絵の提供を確約すること等が盛り込まれた。そしてタイトルは、『ピクウィック・ペーパーズ』に因んで『ピク・ニック・ペーパーズ』(*The Pic-Nick Papers*) にするという風に、ディケンズ色を前面に出すものとなった。

しかし、ディケンズの努力にもかかわらず、トラブル続きでアンソロジー編集は進捗せず、彼を苛立たせた。問題の一つは、寄稿された原稿を一旦コールバーンの許に集めることによって起った。コールバーンが、ディケンズの許可なく編集にちょっかいを出したことに始まる両者の対立は、合意内容を反故にしかねないものだった。ディケンズの当時の書簡には彼を「ごろつき」('sneaking vagabond')<sup>14)</sup> 呼ばわりする言葉さえある。他方で、マクローン未亡人からの切迫した催促の手紙に苛立つディケンズの姿が浮かび上がってくる。

もう一つの問題は、クルックシャンクとの確執である。『オリヴァー』の挿絵の件で、既に両者の間はぎくしゃくしたものになっており、ディケンズとしては、他の挿絵画家に依頼したかったと思われるが、出版者コールバーンがクルックシャンクを強く推したため、彼の挿絵を求めることになった。予想通り、クルックシャンクからの挿絵の提供は延び延びになった。1840年11月19日(契約は1838年8月10日)、ディケンズは、業を煮やしてクルックシャンクに次のような書簡を書き送っている。「マクローン未亡人の為のアンソロジー、準備整いました。是非訪問させていただいて、この三巻本についてご相談したいと思います」<sup>15)</sup>。一種「脅し」のような要望にもかかわらず、クルックシャンクはすぐには応じず、翌年2月17日になってやっと二つのスケッチを持参した。J.T.Brattin は、その内の一つが、おそらく 'The Lamplighter's Story'

の挿絵であり、『ピク・ニック・ペーパーズ』の口絵となった「哲学者の石」(‘The Philosopher’s Stone’)のデッサンであろうと推測している<sup>16)</sup>。

しかし、クルックシャンクは、デッサンを持参したきり、その後梨のつぶてで、ディケンズの要求に応じなかった。ディケンズは関係者に書簡を書き送るたびに、クルックシャンクの不実をなじる言葉を忘れなかった。1841年5月12日、短いが、明らかに苛立った手紙をクルックシャンクに書き送った。「マクローン未亡人の為の挿絵はいつ我々の手元に届くのでしょうか」<sup>17)</sup>。クルックシャンクは応える。「一週間以内には完成させます——ほとんど完成していますから」<sup>18)</sup>。しかし、二週間経っても絵は出来上がらなかった。しかし、遂に1841年7月21日、Daniel Macliseに観劇の招待を断る手紙の中で、ディケンズは「八時に人が来てマクローン未亡人の問題を永遠に片づけるという‘mirabile dictu’ [= 語るも不思議な] ことになりました」<sup>19)</sup>と安堵の声をあげている。実際、アンソロジー三巻本は、契約合意からほぼ三年が経過した1841年8月9日に出版され、マクローン未亡人は450ポンドを受け取ることができた。

### (三)

マクリーディに捧げようとした戯曲 (*The Lamplighter*) を翻案して、短編小説 (‘The Lamplighter’s Story’) へと変容させた作品を、ディケンズはなぜ安易にアンソロジーへ組み入れたのであろうか。考えられることは、当時彼は極めて多忙であったことが理由としてあげられる。『ピクウィック』で名をあげ、喝采を浴びつつあった『オリヴァー』に苦しめられ、『ニコラス・ニッケルビー』の案を練っていたディケンズにとって、マクローン未亡人の要求は、苛立ちを増幅させるに十分であったと思われる。しかし、ディケンズは義侠心を發揮して、既に検証したように最大限の努力を惜しまなかった。他の寄稿家やクルックシャンク等の尻を叩きはしたが、寄稿すべき自己の作品について十分な時間の余裕はなかったであろう。彼らを督促する手紙に彼は「今週自分の作品を提出する用意がある」<sup>20)</sup>という言葉を加えたりしているのは、一種のゼスチャーであろう。1840年にブレッシントン伯爵夫人に宛てた書

簡では「小生この瞬間でも仕事に追われ、アンソロジーを完成させるべき短編を執筆することも儘なりません」<sup>21)</sup>と苦衷を吐露している。アンソロジー発刊の年の4月12日付のフォースター宛の手紙で「マクロン未亡人の為に執筆した『The Lamplighter's Story』を今朝やっと八枚書き終えました」<sup>22)</sup>と言い、この件から早く手を引きたいと付け加えている。

この短編小説とその元になった笑劇とのプロット上の違いは、前者には語りの枠が設けられていること、すなわち冒頭とエンディングに笑劇の内容を語る語りの場が用意されている点を除けば、小説でも中核となる笑劇の内容、つまり、笑劇の中心的プロット——好まぬ相手との結婚を、策略を用いて回避して大団円となる——を形成している紋切り型の喜劇の形式を小説も概ね踏襲している。ただ重要な点に関しては相違があり、検証する必要がある。一方、テーマ（似非科学、とりわけ占星術と錬金術に対する諷刺）に関しては本質的な変更はない。他方で、諷刺の具体的な対象は変更されており、ディケンズが狙う諷刺を捉える必要がある。

笑劇では、人物造型が気質喜劇 (comedy of humours) に沿ったものであるために紋切り型の喜劇感をいっそう強めている。主人公 Tom Grig の 'grig' とは、「こおろぎ」のことで、陽気で活発な若者を暗に指す。実際笑劇でも小説でも彼は若く元気な点灯夫として、毎日街灯に灯をともし職に励んでいる。占星術師を気取っている似非科学者の Mr. Stargazer もその名を分解すれば「星の観察者」(star gazer) となる。彼が心服している若い占星術師 Mr. Moony はその名のごとく（「moony=のろま、愚鈍の意」）電気ショックを受けないと口もきけない科学者バカ。スターゲイザーの息子の名前は Galileo Isaac Newton Flamstead という大袈裟な名であるが、发育不全で、二十歳になるも親には子ども扱いされている（因みに Flamstead はグリニッジ天文台の初代台長 Flamsteed をもっている）。その他、女性陣も喜劇の定番通り、受け身の Fanny（スターゲイザーの姪）や Emma（彼の娘）の他に、Betsy という（ディケンズ得意の）こましゃくれた小間使いが登場し、狂言回しを演じて、二人の女性を苦境から救い出す。

笑劇と小説に共通するのは、冒頭近くで言及される時事的で皮肉なほのめかしである。前者ではそれが笑いの道具として利用され、後者では

諷刺の対象として使われているが、ともに主題と深くかかわっている。1) 笑劇の冒頭では、トムが歌いながら登場するが、その時の歌は J.R.Planché 作の歴史劇 *Charles XII* の中で歌われたセンチメンタル・バラッドであるという<sup>23)</sup>。歌の途中でトムは、韻を踏む語を探しながらうっかり ‘Alderman Waithman’s obstacle in Fleet-Street’ と口走る。当時のロンドンっ子にはピンときた皮肉であったらしい。というのも、参事会員ウエイスマンは数年前死去したが、彼の功績を顕彰しようとフリート・ストリートに建てられたオベリスク (obelisk) が交通の妨げ (obstacle) となり、顰蹙を買ったという。3) 直後に交わされるトムとスターゲイザーの会話は、「意味の取り違い」という喜劇特有の笑いを狙ったものである。

Mr. Stargazer. Have you seen the comet?

Tom. What Comet? —The Exeter Comet?

Mr. Stargazer. What comet? The comet—Harley’s Comet!

Tom. Nelson’s, you mean. I saw it coming out of the yard, not five minutes ago.

Mr. Stargazer. Could you distinguish anything of a tail?

Tom. Distinguish a tail? I believe you—four tails!

Mr. Stargazer. A comet with four tails; and all visible to the naked eye! Nonsense it couldn’t be!<sup>24)</sup> (下線部筆者)

スターゲイザーが ‘comet’ を「彗星」ととっているのに対して、トムは「[旅籠の中庭を行き来する] 馬車の名前」と解釈している。意味の取り違いによる喜劇的一幕である。

笑劇では、さらに「人物の取り違い」がプロット推進の役割を演じることから、冒頭の「意味の取り違い」は象徴的である。一方、小説では、この部分は省略されている。参事会員ウエイスマンは 1833 年に死去しているし、ハーレー彗星は、1838 年には人々の興味を引いたが、1841 年の時点では人々の関心も薄れたためと思われる。代わりに小説では、別種の、しかし、テーマ [似非科学者諷刺] に沿った時事的問題が言及されている。冒頭、居酒屋に集った点灯夫たちの幹事は次のように語り出す。

“If you talk of Murphy and Francis Moor, gentlemen,” said the lamplighter who was in the chair, “I mean to say that neither of ‘em ever had any more to do with the stars than Tom Grig had.”<sup>25)</sup>

(下線部筆者)

ここを含めて、‘Murphy’は四度、‘Francis Moor’は二度言及されている。これらの名は今でこそなじみのない名前だが、ディケンズの頃の読者はすぐに反応したと思われる。というのも、Francis Moor (1657-1715)は*DNB*にも名を残しており、内科医ながら、占星術師として活躍、特に年鑑づくりで名を成した。事実、彼の*Old Moor’s Almanac*はヴィクトリア朝を通じて繰り返し出版されたという。

一方、(Patrick) Murphy (1793-1856)もまた*DNB*に名を連ねており、1838年に『天候歴』(*The Weather Almanac*)を上梓したところ大いに当たった。これは、「1838年の日々の天候の状況を科学的原理のもとに明らかにする」と銘打って世に出したところ45版にも及び、著者マーフィーは£3,000を懐にしたと言われる。この暦が人気を博したのは、1838年1月20日が最も寒い一日になるという予言[おそらく推測]が正しく当たったことによるとされる。1837年-1838年の冬はかくして「マーフィーの冬」と呼ばれ、その当時の流行歌、Thomas Moorの‘Lesbia has a beaming eye’が‘Murphy has a weather eye’というパロディに替えられ、人々はこれを愉しんだという<sup>26)</sup>。

彼らに関しては、さらにうがった解釈がある。ディケンズが二人に言及したのは、実はジョージ・クルックシャンクを揶揄したのだ、というものである。というのも、クルックシャンクは1819年に*The Age of Intellect*の挿絵を描いているが、その著者は‘Francis Moor, physician’なる匿名を使ったこと、また1839年、クルックシャンクは*Comic Almanac for 1839*という諷刺画付の諷刺詩を上梓するが、その中に‘Almanac Day—A Rush for the Murphies’という諷刺的な絵がある。そこには、マーフィーの暦を出版する出版社へ突進する群衆が描かれている。

ディケンズ vs. クルックシャンクの対立構図はこの時期最高潮に達していたようである。事実、この小説においても、ディケンズの苛立ちを愉しむかのように重い腰を上げようとせず、一枚の絵を描くのに、督促

を受けてからも二年数か月を要したクルックシャンクの不可解な行動と態度はこれで理解できる。クルックシャンクは、本心では挿絵提供を拒否したいところだが、出版者コールバーンとの約束の他に、マクローンとのかつての関係 [『ボズのスケッチ集』の挿絵担当] もあったであろう。しかし、ディケンズとは関わりたくないというジレンマにおちいつていた。ディケンズの要請にすぐに応じなかった理由をこう解釈してもあながち的外れな推測ではないだろう<sup>27)</sup>。

次に、笑劇では言及されないが、小説で揶揄されており、常々ディケンズが世評に対して疑問視している歴史上の人物に Dr. Isaac Watts (1674-1748) がいる。

‘Tom reached up to pat him on the head, and quoted two lines about little boys, from Doctor Watts’s Hymns, which he had learnt at a Sunday School.’<sup>28)</sup> (下線部筆者)

トムが「日曜学校で習った、幼い子供に関するワッツ博士の言葉を引用した」という短い文の背景には、18世紀後半から19世紀前半にかけての幼児教育の歴史が横たわっている。彼は神学者・讃美歌作者として幼児教育には欠かせない人物であり、ディケンズは多くの作品で彼の名に言及している。幼児教育における宗教教育をその難解さ故に暗に批判しているように、ディケンズは必ずしも満腔の敬意を彼に払っているとは言い難い<sup>29)</sup>。

一方、当時の人々の尊敬を集めた人物 Father Mathew [Theobald Mathew, 1790-1856] にディケンズが言及した時も、その背景を注視する必要がある。

‘He [Tom] went that very afternoon on a new beat: as clear in his head, and as free from fever as Father Mathew himself’<sup>30)</sup>

(下線部筆者)

「[トムの頭は] マシュー教父のごとく熱に浮かされずすっきりしていた」という一文は、マシュー教父への暗黙の皮肉と捉えることができる。彼は1838年絶対禁酒の誓いをたてた後、イギリスのみならずアメリカ

にまで足を伸ばして禁酒を「熱狂的に」説き ‘Apostle of Temperance’ と呼ばれた。絶対禁酒運動は、特定の宗教団体のみならず、個人のレベルでも多くの人々が賛同した。実は、クルックシャンクもその一人で、ディケンズは彼のその姿勢をファナティックなものとして拒絶したことが、両者の対立を深めた原因の一つと考えられている<sup>31)</sup>。

さらに、テーマ及びプロットと関係する歴史的事実への言及もある。

‘…the experiment was made, and they lighted up Pall Mall.’<sup>32)</sup>

ディケンズは、オイル灯からガス灯へと、イギリス街路灯における転換という歴史的事実をプロットと巧みに結び付けている。このように、小説では重層的にさまざまな言及や仄めかしがちりばめられており、単調に陥りがちなプロットに味を添えている。

一方、笑劇と小説の違いは、主人公トムへの力点の差異となって表れている。小説では、トムへの注視は一貫しているのに対して、笑劇では彼が登場せず、他の登場人物たちが舞台を占領するシーンが見られる。一幕二場冒頭は、トムが紹介される以前の場面で、そこでは、ベツツイ、エマ、ファニー、ガリレオのみが登場している。また、ベツツイを中心に企てを話し合う一幕二場の後半でも、トムは登場しないなど、プロット上比較的重要な場面で主人公トムは退場している。

このような焦点の当て方の違いは、小説においては「語りの枠組み」が設定されていることと関連している。つまり、トムの物語を語る外枠が最初に用意されており、読者は絶えず、語りの場を意識しながら、トムの物語を読むことになっている。彼の物語は、居酒屋で集まった点灯夫たちを前に幹事が彼らに語り聞かせる形をとっている。この語りの場の設定が大きな意味をなすのは、笑劇のプロットであり、小説の中核的プロットであるトムの体験の真実性と関わっている点である。語り手は、トムがその体験の前に何気なく酒に酔って番小屋で一晩過ごしたが、それは、同じ日に叔父が亡くなって、その悲しみを酒で紛らしたからだと言幕を張っている。そして、エンディングでも、「部屋が目の前で泳ぎだし、気が付くと再び番小屋の中にいた」とトムの意識を語る。語り手は、さらに、治安判事はトムが魔法をかけられたのだと冗談を言ったこと、また彼の雇人たちも、彼が物語を捏造したとして彼の主張を疑って

いることも語っている。

この語りの重層性は、特別洗練されているわけではないが、笑劇の内容全体を酔った男の空想と解釈可能な道へと導いている。ディケンズはトムの物語を愉しむよう読者を仕向けるが、もっともらしい話としてこれを受け入れるべきと読者に強制もしない。このように、ディケンズは上演されることのなかった笑劇を、人物、プロット、対話等にあまり変更を加えない代わりに、語り手の声を操作することによって新しく短編小説を読者に提供した。

#### 註

- 1) 1851年ディケンズは、Mark Lemonの*Mr. Nightingale's Diary*を素人芝居用書き直したり、1857年にWilkie Collinsの*Frozen Deep*に手を入れて演劇用に直してはいる。See *Oxford Reader's Companion To Dickens*, ed. Paul Schlicke (Oxford, 1999), 454.
- 2) *Letters of Charles Dickens*, eds. Madeline House and Graham Storey, I (Oxford, 1965), 279. 以下同書。
- 3) *Letters*, I, 280.
- 4) テキストはフォースター・コレクションより再録。タイトルはTHE LAMPLIGHTER, A FARCE, BY CHARLES DICKENS (1838)。Farce「笑劇」は「日常の卑俗な場面を題材とした滑稽劇」。ディケンズは生前どの全集にも入れるのを拒否したが、現在はインターネットでも読むことができる。
- 5) 二人はお互いの子供の名付け親になったり、ディケンズ夫妻がアメリカ旅行に出かけた時(1842年)、マクリーディは彼の子供たちの面倒を見た。
- 6) *Letters*, I, 328.
- 7) *Letters*, I, 362.
- 8) See *Letters*, I, 364.
- 9) [G] Bartleyは役者兼Macreadyの劇場共同経営者。若いディケンズがオーディションに応募しようとした際、テストする係だった。[J.P.] Harleyはディケンズ作の二つの喜劇に既に主人公役で出演していた喜劇役者。
- 10) *The Diaries of William Charles Macready*, ed. William Toynbee (London, 1912) I, 480.
- 11) *Letters*, I, 468.
- 12) *Letters*, IV, 322.
- 13) 宮崎孝一他訳『定本チャールズ・ディケンズの生涯』上巻 研友社 56頁。

- 14) *Letters*, II, 249.
- 15) *Letters*, II, 151.
- 16) See Joel J. Brattin, "From Drama Into Fiction: *The Lamplighter* and 'The Lamplighter's Story'," *Dickensian* 85 (1989), 131-39.
- 17) *Letters*, II, 282.
- 18) *Letters*, II, 282. n.2.
- 19) *Letters*, II, 334.
- 20) *Letters*, I, 481.
- 21) *Letters*, II, 58-9.
- 22) *Letters*, II, 258.
- 23) Brattin, *op. cit.*, 135.
- 24) *The Lamplighter*, (<http://home.earthlink.net/~bsabatini/Lnimitable-Boz/etexts/Lamplighter.html>), 4.
- 25) Centenary Edition (Chapman & Hall, 1911), Vol.36 in 36 vols, 281.
- 26) Brattin, *op. cit.*, 137.
- 27) 青木、『成城文藝』No.217, 1-16. 参照。
- 28) Centenary Edition, vol.36, 285.
- 29) 青木、前掲書、No.205, 1-24. 参照。
- 30) Centenary Edition, vol. 36, 285.
- 31) See L.Patten *George Cruickshank's Life, Times, and Art* (Rutgers Univ. Press, 1996), vol.II in 2 vols, 338.
- 32) Centenary Edition, vol.36, 284.